

# 寄木のずくで飾る箸箱づくり

箸を作らせて、木材の組織を学習させる実践は、多くの教師が試みている。しかし、作った箸を、そのまま家に持ち帰らせるのは、ものさびしい気がする。一步進めて、箸箱を製作させることで、箸づくりをより一層、意欲的なものとすると同時に、地元の伝統工芸である寄木細工のずくで表面を装飾することで、木工具の基本を学べる題材に仕立てた。

## 1. 箸箱の構想

箸の長さは、その人の”ひとあた”(親指と人差し指を開いた長さ)の1.5倍だと言われている。中学生の身体にあった箸の長さは、だいたい22cmぐらいになるので、それが入る230mmを箸箱の長さにした。

箸箱の幅は、28mmである。やや狭いので、生徒の作った箸が太いと、箸の天と先を互い違いにして入れないと入らないときがある。といって、これ以上幅を大きくすると、トリマービットの幅の2倍以上になって、ふたの差し込み口の部分に材料の削りのこりができるので、これが限界である。

ふたはスライド式にしているが、それ以外にも、ふたを本体にかぶせるタイプ、ヒンジを作ってふたを倒したり、上げたりするタイプといろいろ考えられる。しかし、これが一番手っ取り早く、デザイン的にも見栄えが良いと思う。

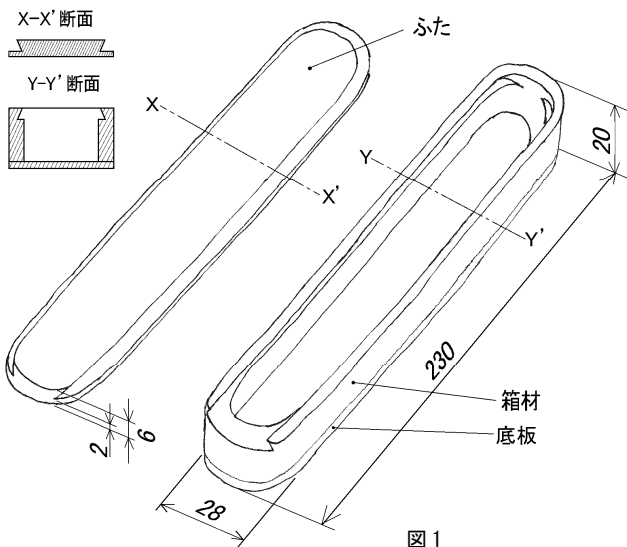


図1

## 2. 作り方のポイント

製作で一番大変なところは、ふたがスライドする溝を作る部分である。トリマーは、本来手でもって使うもので、生徒にも比較的安全に使わせることができる。しかし、この箸箱に限っては、正確性が伴うので、トリマーはスタンドに固定して使用する。

作業中、ビットが材料にかじりついて、はね飛ばされることがあるので、生徒には使わせることはできない。そのため、スライド溝の部分だけは、教師の方で準備してやる必要がある。

ふたの溝を作るには、図4のようにスタンドの定規からAmm離れたところにビットを位置決めしておけば、同じビットでふたの左右に溝を作ることができる。

ところが、箱本体の溝は、ふたを入り口から入れたら、奥で止まるようにしてあるので、左右の溝は、同じビットでは作ることができない。ビットは定規からBmm離れたものとCmm離れたものとの2回に分けて位置決めし、材料を送る。これは大変面倒なので、BmmにセットしたトリマーとCmmにセットしたトリマーを2台用意すれば、交互に使って溝が作れ、調整も容易で便利である。

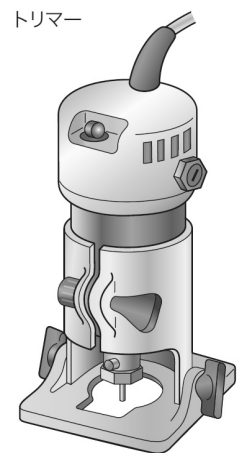
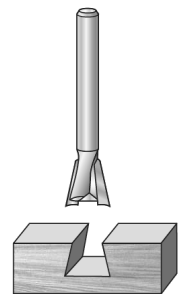


図2



アリ溝ビット  
図3

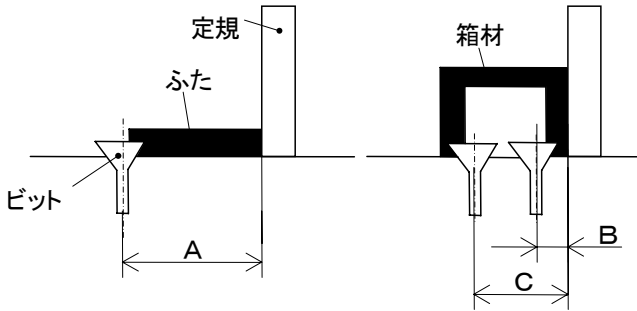


図4

生徒が行う主な作業は、糸のこ盤による曲線挽きとベルトグラインダーによる成形である。

糸のこ盤の曲線挽きは生徒にとっては難しいので、円弧の部分は、ボール盤に板ぎりを付けて穴を開けてしまい、糸のこ盤では直線挽きだけをさせるという方法をとる。

箱材の中をくりぬいたら底板をボンドで接着する。ボンドが乾くまでは、クリップで固定しておく。乾いたら、教師はスライド用の溝を切る。

ふたの材料は箱材よりも長めにしておき、ふたの加工が終わったところではめ込み、余った部分をのこぎりで切断する最後は、ベルトグラインダーで成形して、できあがりとなる。

素地みがきした後は、ふたの表面にずくを貼る。ずくとは、寄木の種板をかんなどで薄く削ったもののことを言うが、このときに使うずくは、薄い和紙が裏張りされている。

塗料は、水洗いしても大丈夫で、口に入れても無害な、油性のウレタン樹脂塗料を使う。油性なので、容器は捨てられる紙皿を使い、刷毛は、2cm幅の平バケを多めに用意する。刷毛は、使い終わったら有機溶剤でよく洗っておかないと、硬くなって次に使えなくなる。

### 3. 寄木のずくから、かんながけのワザを学ぶ

箸から箸箱までの製作には、約11時間かかった。この間に、使わせた木工具・機械は表1に示した通りである。げんのうやかんなが登場しないので、これで木材加工を学んだというには、やや内容が貧弱である。

そこで寄木の種板からずくを削り出すかんながけのワザをビデオで見せたあと、かんな削りを体験させる授業を仕組んでいる。

表1 箸箱の工程表

工程	作業名	作業内容	道具や機械
けがき	けがき	・箸を入れる溝を作るため、穴のあける位置に印をつける。	鋼尺
部品加工	穴あけ 切断 接合 溝切り	・ボール盤で穴あけをする。 ・糸のこ盤で直線びきする。 ・ボンドで底板を接着する。 ・トリマーで箸箱のふたと本体にアリ溝を作る。	卓上ボール盤 糸のこ盤 クリップ ボンド トリマー アリ溝ビット
組立	切断 はめ込み・調整	・長く余ったふたを切断する。 ・ふたを本体にはめ込み、面をそろえる。	片刃のこぎり ベルトグラインダー
塗装	下地づくり	・繊維方向にそって紙ヤスリで磨く。ベルトグラインダーの傷も取る。	紙ヤスリ
	塗装	・下塗りし、乾燥させたあと、毛羽立ちを紙ヤスリで取る。 ・上塗りする。	はけ 紙ヤスリ

班に1枚ずつ、ヒノキの板材を渡して、かわるがわるかんなくずを出させる。できるだけ長いかんなくずが出せるよう競争をさせるが、なかなかビデオで見たようにはいかない。改めて職人さんのワザに感服することになる。

### 4. 生徒の反応

箸、箸箱は、生活に密着したものなので、生徒は興味を持って取り組む。ふたが本体と合体するようになると、より一層やる気が出てきて、一生懸命、磨きはじめる。

「先生、いつ頃完成しますか？」

「どうして？」

「父の日のプレゼントにしたいので・・・」

などの会話も出る。現在では、箸箱の使用は入院したときに使うぐらいである。作っただけのものに愛着を持ってもらえる題材だと感じている。

